

令和2年度

中標津町総合教育会議議事録

令和2年度中標津町総合教育会議

1 日 時 令和3年1月28日(火) 10時00分～11時25分

2 場 所 中標津町役場 301号会議室

3 出席者

町 長	西 村 穰
教 育 長	山 田 康 司
委 員	義 盛 幸 規
委 員	助 口 明
委 員	南 むつ子
委 員	青 山 幸 子
教育部長	木 村 実
教育指導監	粥 川 敏 宏
管理課長	舟 橋 利 明
総務係長	表 健 一
学校教育課長	吉 田 憲 史
指導室長	柴 田 達 也
生涯学習課長	山 宮 克 彦
学校給食センター長	吉 田 利 彦
農業高校事務長	吉 川 裕 二
書 記	黒 瀧 詩織里
農業高校教頭	佐 藤 麻 美
農業高校教諭	加 瀬 利 憲
農業高校教諭	三 品 步
農業高校教諭	佐 藤 正 三

4 欠席者 なし

5 傍聴者 なし

6 議 事

(1) 新学習指導要領に対応した独自性の高い教育課程の編成

(2) 令和2年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査

～中標津町における調査結果～

(3) その他

1 開 会

○管理課長

皆さん、おはようございます。

本日は、お忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。

ただいまから、令和2年度中標津町総合教育会議を開催いたします。

ここで、西村町長より挨拶をお願いいたします。

○町長

皆さん、おはようございます。

委員の皆さまには、お忙しいところ、お集まりいただきまして、大変ありがとうございます。

さて、もうマスクでの生活にすっかりなじんでしまったというか、コロナの感染症が全く収まらない状況が、結局1年を超えてしまいまして、これからはワクチン接種に向かっていくこととなりますけれども、当地域では、感染が広がっていない数少ない地域だと思っておりますので、こういった状態をしっかりと保ちながら、住民の安心・安全を守っていきたいと思っております。

さて、この間、高校の進学率等が出ていましたけれども、少子高齢化でありますから、高校も人を集めるのに非常に難儀しているところでありますし、1倍以下になりますと、ほぼ全員合格ということで、本来の選抜の在り方はどうなのかという部分も含めて、こういった人口減少が進む地域にとっては、辛い状況になっているのかなと思っております。

その中で、農業高校は、人数がぐんぐん増えておりまして、55人という非常に素晴らしい状況になりました。ほかから見れば、どうして農業高校が増えるんだと思われるかもしれませんが、もちろん、先生たちの頑張り、生徒たちの頑張り、そして、教育委員会のしっかりとした後押しがあってこその実績だと思っております。

頑張れば入学生も増えてくる、応募者も増えてくるという、非常に良い例であると思っておりますし、こういったことをどんどん町の教育に活かしていければと

思っています。

さて、この教育会議でございますけれども、平成 27 年に教育委員会制度の大きな改正がございます、それに従いまして、この会議の設置が義務付けられたところでもあります。

行政側と教育委員の皆さま、教育委員会と、しっかりとした綿密な連携を取りながら、教育行政の推進、そして、いろいろな改革に向けてしっかりとした議論と、併せまして、良い教育の町を構築するということになりますので、今日は短い時間ではありますけれども、積極的な議論をいただきますようお願いを申し上げます、挨拶とさせていただきます。

今日はどうぞよろしく願いいたします。

○管理課長

それでは、早速議事に入らせていただきます。

中標津町総合教育会議設置要綱第 4 条第 3 項の定めによりまして、これより町長が議長となり、進めさせていただきます。

それでは、西村町長よろしく願いいたします。

○町長

はじめに、新学習指導要領に対応した独自性の高い教育課程の編成につきまして、中標津農業高校の皆さんに出席いただきましたので、説明をお願いいたします。

○中標津農業高校 加瀬教諭

改めまして、おはようございます。

本日は、このような貴重な場を設けていただき、ありがとうございます。

本校の状況につきましては、町長の挨拶にあったように、町民の皆さまに支えられている学校だということで、教職員一同、感謝申し上げている次第でございます。

本日は、新学習指導要領に対応した独自性の高い教育課程の編成ということで、学校で今まで実践していること、これから私たちがどういう教育活動を目指しているかというところにつきまして、説明をさせていただきます。

私、農業高校で教務を担当しております加瀬と申します。よろしくお願いいたします。

○中標津農業高校 三品教諭

同じく、農場部を担当しております三品と申します。よろしくお願いいたします。

○中標津農業高校 佐藤教諭

農場部の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

○中標津農業高校 加瀬教諭

お手元の資料とスライドを使って、説明をさせていただきます。

流れですが、1から3番を私から説明させていただき、4、5番につきましては、農場部の三品から報告をさせていただきます。私の持ち時間が20分、三品20分ということで、合計40分のお時間をいただくというような形で進めさせていただきます。

早速ですが、中標津町の概要ということで、資料1ページをご覧ください。

中標津町の人口は、進学・就職というようなライフイベントの関係で、若年層が流出しております。流出した分、じゃあ入ってきているかという、入ってきていない現状でございまして、人口が減っているというような背景も考えられているのではないかと考えております。

次のページ、中標津町の人口が約23,200人いる中で、年齢構成別に見てみると、年少人口は微減ということで、下の推移になっております。生産年齢人口が減少している中で、老年人口といったおじいちゃん、おばあちゃん世代が増えているところで、若いマンパワーがどんどんいなくなっているという現状を分析しております。

あわせて、高校の卒業生の進路アンケートの中で出てきた事実なんですけれども、進学で、65%くらいの生徒が町から出ていくことと、就職でも、町のほうから出ていくという事実がございます。

ですので、3割の若者が、このようなかたちで、いろんなライフイベントに伴って、町を離れていってしまう事実がございます。

新学習指導要領ですが、既に、小学校の段階で新しく移行しております。日本の学校全体が、このような新しい学習指導要領に移行するというところで、10年に1回の改訂に伴って、移行期間を設けているところでございます。

中学校につきましては、2021年4月から年次進行ということで、新しく入ってくる中学1年生から、新しい学習指導要領になっていきます。

2022年には、高等学校の移行期間が終了し、新入学生から新しい教科書、新しい学びがスタートするといったことで、計画しております。

その中で、生きる力を育むということで、確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成という大目標にのっとり、新カリキュラムを作成しているという準備段階でございます。

一番下の文章に、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して、より良い社会を切り開く力を付けましょうということで、各校で教育課程を編成するに当たって、いろんな特色を出すために、先生方が生徒の実態を調査して、どんなカリキュラムを作ったらいいかというようなことをしてございます。

昨日の道新にもありましたが、普通科の再編を考えているというところで、どのような再編かということ、課題解決能力を育む学習課程を作りましょうということで、課題解決能力というのが、今の社会で必要だというようなことで、学校教育の中でも取り入れていくというような流れがございます。

それで、生徒たちが、学びを通して何ができるようになるか考えていかなければいけないということで、3つの求められる能力があります。学びに向かう力・人間性、知識・技能、思考力・判断力・表現力というものが、総合的に必要だということです。

全て包括しているような人間像になるのが一番良いんでしょうが、なかなか

難しいということで、できる限りこの3つの力を付けようねっていうのが、総合的な探求の時間ということで、小学校・中学校・高校という発達段階でも、このような時間が設けられています。

高校では、2、3単位くらい、この時間が設定されているのですが、ここにもあるように、中教審の方針を受けて、先ほどの3つの力を育むために総合的な探求の時間というのを使って、三位一体、学校・地域・家庭の教育を実践していきましょうというものが必要なのですが、農業高校は、総合的な探求の時間という時間を代替して、課題研究という科目に落とし込んで、いろいろな活動をしています。その中で、生徒に成績も付けています。

総合的な探求の時間は、例えば、5とか4とか3とかは付けなくて、学習到達度がどれくらいあったか、先生方がコメントを調査書などに書きますけれども、農業高校では代替しているので、課題研究の成績を付けているという形になります。

話は変わりますけれども、日中韓の生徒たちの中で、どれだけ自尊心を持って学習活動に当たっているかというようなデータなんですけれども、日本の生徒というのは、非常に自尊心がない。その反面、自己肯定感がかなり低いというところで、やっぱり成功原理が乏しかったりとか、自分の良さに気付いていないっていうのが、日本の生徒たちの秩序というところを総合的に考えて、本校はアクティブラーニング、とにかく人と関わりを持って、いろんな活動をしていきましょうというのが、このページの視点となります。

実際、本校と計根別学園で編成授業ということで、食育活動をしています。15年に入っているんですけども、成果としては、情報だったり、思考が濃くなった、ゲームの幅が広がった、共同作業をすることで、自己肯定感の塊になっている、その中でも課題はあるけれど、というところなんですけど、このような実践が認められていて、2014年、2018年に食育活動などの掲載がされています。

私どもが感じているところは、好きなことであったり、興味のあることだけではなく、苦手なことに挑戦して、工夫して頑張るといふことの経験をさせて、

先ほど出てきました3つの力を、バランスよく付けていきたいと思いますという活動をしております。

このアクティブラーニングがどうして良いかというところなんですけれども、よく私たち高校教諭の研修で出てくるものなんですけど、ラーニングピラミッドというものがあります。学習定着率を示しているものなんですけれども、ただ教室で講義を受けるのは、学習定着率は5%しかないけれども、実験・実習をしたら30%になります。自ら体験したら75%、人に教える・説明すると90%も学習が定着するというデータがございます。

ですので、課題研究の中で、小・中学校と連携をして、いろんな課題を設定し、問題解決していくというような学習は、やはり人間形成においても素晴らしい活動であるということも、ここで証明されているのではないかと感じてございます。

それでは、新教育課程について、何をしているかというところなんですけど、新教育課程を作るに当たって、どういう手順を踏んだか説明します。

まず、学校目標、地域・保護者・学校で、どのような生徒を育てたいのかというのを、職員、管理職と相談し、設定しております。

次のステップとしまして、必要な支援であったり、連携、どういうふうにな何を学ぶかを考えました。

それをベースに、教育課程を踏みまして、その教育課程を通して、生徒たちが何をできるようになるのかというものを考えて、新しい教育課程を編成いたしました。

階級マネジメントというようなことになるんですが、この茶色い部分のところが見込まれる成果、若しくは今まで食育活動の中で出た成果も含まれております。

言語活動の充実だったり、教職員の指導力も向上できる、あと、指導と教科を一体化する中で、常に授業態度のアップデートができますということ。中標津町の教育指標にもあるように、生徒の普段の生活態度であったり、保護者との一体感が生まれるというようなことも考えられるところでございます。ひい

では、職業観の調整にもつながるのではないかとということも考えて、このあと、三品のほうから提案というような形に結びついていきます。

これから提案することにつきまして、やはり教育課程の中で、落とし込んでいかなければいけないというようなこともありますので、今までやっていた教育課程を見直して、農業科目の中で、地域で活動できる時間数を増やしております。

高校なので、評価とか、いろんな面で、保護者が心配するケースがあります。先ほど説明したように、教科は最終的に5段階評価で評価できるような態勢を整えてございます。

実際、地域でいろんな活動をする中で、どのような教科、どのような先生に携わって、一斉にやるかというようなことを考えた場合、農業科目のほかに、理科だったり、家庭科であったりとか、農業の活動をする中で、似たような単元を持っていて、似たような学習をするというような教科を洗い出し、重複しているものについては精査をして、勉強する際により深く学べるような体制をとということで、配列表に落とし込み、カリキュラムを編成しようということでやったのが、お手元の資料にございます教科等横断的な活動の実践です。

食品ビジネス科で作ってきたということで、1年生の理科と家庭科、それを学習した上で、2・3年生の課題研究をどういうふうにつなげていくか、リンクしていくか、教科を横断して学びましょう、学べる環境を整えましょう、その上でしっかりとした学力をつけて、コミュニケーション能力をつけて、地域と連携をして、学びを整えましょうというような学習カリキュラムを設定いたしました。

○中標津農業高校 三品教諭

改めまして、農場部の三品と申します。よろしくお願いたします。

今、加瀬から説明がありましたが、データにもありますとおり、中標津町において、若い世代の流出が増えていて、流入が減っているというような状況の中で、若い世代に町をもっと好きになってもらいたいとか、あるいは先

ほどの新学習指導要領に対応した、生徒に身に付けさせたい力を総合的に勘案して、私たちが現在行っている酪農教育活動というところを軸にした取組を、何かできないかと考えたところでもあります。

現在、私たち町立高校の強みを生かして、一緒に加わらせていただくことによって、それぞれの発達段階に応じて、学ばなければいけない力に一貫性を持って教育できるプログラムにできるのではないかと考えました。

そのようなプログラムを実現するために、私たちが考えたのが、次にあります起業になります。

起業ですので、読んで字のごとく、会社を興して、可能であれば、小学校から高校生の生徒が役員となったような組織を編成して、経営活動を行っていくというようなことができたなら面白いんじゃないかなと考えています。

経緯としては、職能教育活動で、地域を知った若者が、柔軟な発想で何か新しいことを展開することによって、新たな事業を起こす、あるいは現存の我々が持つ農業という教育のプログラムを通して、持続可能性の高い販売活動を行っていくというようなことができたなら、もっと生徒に町を理解していただいて、小学校段階から町を理解できて、町に貢献したいという若者が増えてくれるんじゃないかなと思います。

私たちのレベルと言うと、高校の中でということにはなるんですけども、まず、働き方改革というのが1つありました。私たちも、研究班というのをそれぞれ1つずつ持っておりまして、それぞれのPDCAサイクルに基づいて、研究活動を行って、その成果を発表するという、粥川指導監には、昨年末お世話になりましたが、実績発表大会という場で、報告をさせていただいています。ちょうど今日、全道大会が行われております。

現在のプログラムでいきますと、その研究班の顧問の裁量といいますか、その顧問の情熱とかによって、その研究班活動の中身が、ある程度決まってくるんですけども、これを教育課程に位置付ける、その授業の中で、研究班活動みたいなものを行うことによって、ある程度その指導がマニュアル化されて、人材が変わっても、必要最低限の技術を確保するというようなこと

ろが、目的の1つです。

もう1つが、先ほど町長からもあったように、生徒募集の観点というところで、ほかに類を見ない独立性の高い教育課程を編成することで、町外への流出を防ぐとともに、町外からの流入というのも少し期待をしたい。

それで若い世代から、こういった教育をしていくことによって、企業側にとって、少しでも有望な人材を早期から確保するという意味では、意味があるのではないかなと思ったところがあります。

中身としましては、上の3つで、今、高校で行っているようなところではあるんですけども、原料生産から製品の開発、流通、販売、それから、町の課題としても挙げられているんですけども、地域の空き店舗であったり、既存の施設を活用した開発製品の販売活動、あるいはそれに伴って、地域人材・企業と連携して、こういった活動を進めていくところで、まず地域資源を活用しましょうというところ。

起業ですので、どうしてもお金が絡んでくるかなと思います。独立採算制による収支報告をすることで、お金の流れを理解できます。人・物・お金の一連の流れを理解することで、高校卒業段階で、経営感覚を見つけるというのが1つ大きな目標となっております。

ただ、営利活動に走ってしまうと、教育本来の目的を見失ってしまうので、我々は、それを評価として落とし込んで、先ほど加瀬が申し上げたような3つの力というのを取り組んでいく必要があるのかなと思っております。

期待される効果というところで、生徒にとっては、産業理解、町の魅力の再認識、将来の職業選択ということで、町を知るというのが1つ。それと、経営感覚の醸成というところで、専門学校・大学が無い地域ではございますので、高校卒業の人材が、主となって活躍していく町かなと思います。

ですので、高校卒業段階で、こういう感覚を身に付けることが、町の活性化に一役買うのではないかと考えてございます。

地域の大人にとっても、先ほど申し上げたような人材確保ですとか、子供から見られている働きがい・充実感というところで、最近流行っているSD

G s というような観点に基づいても、持続可能な町づくりに一役買っているのではないかと考えてございます。

我々としては、来年度から中学校の新学習指導要領が始まることを受けて、段階的に連携を強くし、2025年頃に起業というところの活動を開始していく。その2025年という5年後を見据えた形で、バックキャストिंगですね。1年ごとに、このような連携のイメージがありますよってところが、11ページから13ページまで記載をしております。

1番は、14ページにございます、起業の活動イメージというところにあります。3つの学園の3年生、6年生、7年生、9年生、この4つの学年を対象にした食育活動、あるいはその起業の活動を行っていけないかということになります。

どうしてこの4つの学年なのかというところなんですけれども、小学3年生から、総合的な探求の時間というのが開始されます。

それに伴って、高校が連携することによって、学校補助の中で、地域作物を育てるですとか、あるいは基幹産業である酪農の体験をするというのを、小学校段階で、体験というかたちで食農活動をする。そして、中学部に上がった段階で、それぞれの小学校から合わさってくるところもありますので、その不安を解消するために、7年生の段階で、もう1回起業活動を受けて、今度は、一次産業で得たものをどう加工するかというところの連携をしていきましょう。最後、9年生で、その作ったものを販売していきましょうというようなところを、包括的に行っていきたいなと考えてございます。

授業は、総合的な学習の時間となっておりますが、探求の時間の1単位分を使っていきたいと考えてございます。

ここからは、イメージということになるので、実際に動き出してみないと、あるいは小学校・中学校と、具体的に煮詰めていかないと分からないところではあるんですけれども、イメージとしましては、小学校・中学校それぞれの生徒会・児童会の方々を中心に、役員も配置をして、いろんな会議に出たりですとか、そういったもので企画開発ですとか、実際に製造活動を行って

いく。

じゃあ、具体的にどう実証していくのかというところで、私たちが15年間行っている計根別の食育学校を、まずは、全町に広げていく形で、出前授業をしてみたりですとか、各校の農場で地域作物を栽培していたりですとか、あるいは本校の加工施設、こういう学校センターを使用させていただいて加工の体験活動をしていくというようなところでは。

あと、このコロナ禍で普及してきたオンライン会議システムを使ったりリモート会議であれば、移動の手間もなく、このような話し合いもできるのかなというところで、こんな実施方法を想定してございます。

組織図としましては、1イメージとしてはこの形で、生徒が主体となって、このような組織を作って、授業活動を行っていくというようなところがございます。

次に、5つの部門に区切って、我々が加工部門を3部門持っていますので、更に3部門に分けます。その加工したものが、どれぐらい町民に必要とされているかっていうマーケティングのようなところも、部門として設けます。あるいは、そもそもの企画開発部というものを設けます。そういった部門分けを行って、学園の生徒を部門ごとに分けて、実施をしていくイメージです。

これらの活動は、あくまでイメージになりますので、今後の話し合いによって変動していく場合もあるんですが、あくまで教育活動という観点を失ってはいけない。

次の、学習要綱に特化したというところにつながっていくんですけども、現行の学習評価の4観点があるんですが、これらが、新学習指導要領に伴って、3要素という形になっていきます。

この3要素の中で求められるところが、指導と評価の一体化というところにありますので、指導に応じた、連動した評価をできるようにするべきで、その評価が、そのまんま社会に出た時に、役立つ評価であるべきだという観点を持って、私たちの方で評価報告の5点としました。

次の資料になるんですけども、やはり社会に出た時に評価される人材つ

てどんな人材なんだろうというところで、私たちも悩んで、実際に、町のコンサルをされているような方に相談をしてみました。

そうすると、起業特化というものを一部ご紹介いただいたんですけども、起業評価というものは、こういう観点別の評価っていうものを行っていることが分かりました。

その観点別の観点というのは、どういうところがあるかだったんですけども、この(2)(3)に書いてあるところで、本人評価・管理職一次評価・管理職二次評価という、周りの人が評価をするっていうような仕組みがあるのはもちろんなんですけれども、その項目として、会社理念・方針をしっかりと理解しているか、勤務態度がしっかりとしているか、時間管理・約束がしっかりと守れているかというところを見ていくと、実は、学校の教育活動というのは、連動するものがすごい多い、その会社理念・方針というところは、授業規律がしっかりとできているかどうか、授業規律が守れているかどうかというところにつながっていきますし、勤務態度っていうところは、教員に対する言葉遣いですとか、大人に対しての言葉遣いっていうところにつながってくるでしょうし、普段から管理をしている遅刻・欠席・早退・挨拶という部分は、普段、日頃の学習評価にも連動しているのではないかとこのところで、こういったところを、会社の評価と学校の評価を連動させるような形で評価されれば、会社でも評価されるんだよっていうところを、小学校の段階から伝えていくことで、義務教育期間の9年間から高校の3年間、合わせて9年間で、こういったところを育てていくことによって、社会に出た時に、戸惑いのある生徒が少し減っていくのではないかとこのところで考えます。

では、そのような評価をどう設定していくかというところなんですけれども、探究活動の課題の設定をして、先ほど申し上げたように、観点を一つ一つ設定して作っていくことになります。

最初は、一つ一つ観点を設けていくのは大変かなと思うんですけども、1つできると、それがマニュアル化という形になって、今後の世代においても使っていけるもの、改良していけるものにつながっていくのではないかな

と考えてございます。

最後に、まとめになるんですけれども、中標津がより魅力的な町になるためにですとか、高校がより人の集まる学校になるためにというところで、私たちがいろいろ考えて提案させていただきました。

持続可能な町づくりの中に、中標津ってこんな町だよねっていう、その頭に冠がつく町になるというところで、起業を行うことによって、どういったことが考えられるかを何個か挙げてみました。

当然、起業体験ができる町というのは当然なんですけれども、先ほど授業規律ですとか、挨拶とかを徹底することによって、この町は礼儀が正しい町だなど、外から来る人に与える印象というのを改善していくことで、現町長の掲げられている住みやすさNo.1の町に、少しでも近付いていけるのかなというところなんです。

ただ、我々も、これからもっと練り上げていかなければならない部分もあると思います。皆さまから多くの意見をいただきながら、あるいは小・中がいろんな連携を図りながら、教育課程を進めていきたいと考えておりますので、何かございましたら、私たちまでお知らせいただけるとありがたいです。

本日は、貴重な時間をいただき、ありがとうございました。

○町長

今、農業高校のお三方から説明がありました。

率直なところ、以前の農業高校のイメージからすると、相当変わったなという感じがしておりますし、まさに、新しいことを展開していこうとしている。

さっきの挨拶でも申し上げたとおり、子供の数が減っている中で、高校の存在するというのが、それぞれ大きなものになると思っております。

その中で、やはり、魅力のある学校をしっかりと作っていこうという、非常に素晴らしいところがありますけれども、それが、生徒数の増加にもつながっていると思いますし、更にそれを進化させようという試みが、力強く聞こえましたし、頑張っていたきたいなと思いました。

今まで、食育とかにおかれまして、学校のいろんなクラブ活動を含めて、全道・全国大会などに出場するところもございますし、非常に頼もしい活躍が続いておりますしね。

新しい取組の説明が終わりました。そして、分からないところなども含め、皆さんからご意見をいただきながら、今の話について、盛り上げていけたらと思いますので、よろしく願いいたします。

○義盛委員

すみません。教育委員の義盛と申します。

何点か、分からないところがありましたので、教えていただきたいです。

まず、三品先生からお話しいただきました起業っていうのは、具体的に会社を設立するというところまで、見越しておられるのでしょうか。

それと、SDGsに本当につながるものなのかどうか。当然、子供たちは入れ替わっていきますから、そういう中で、どのようにSDGsにつながっていくのか。まず、その見通しを教えていただきたいです。

会社を設立するという事は、会計という問題も出てきますので、まだそこまでもしれないんですけれども、そういう問題の理論を整えていただきたいです。

農業高校という、普通科ではないというメリットを大きく生かした活動として評価するんですが、構想学校っていう学びの場に、起業ってところが、果たしてそのまま導入していいものかっていう懸念は残ります。

経済活動と、教育っていうものの兼ね合いを、ちょっと足して考えてみていただいた方がいいかなと思います。

教育というのは、本来、経済活動とはマッチしてこないものだと僕は思います。

それとですね、農業高校の活動については、高く評価しているつもりで、長い間頑張ってこられた成果が、生徒数の増加につながってますし、地域での評価の高まりにもつながっていると思うんですけれども、例えば、緑クラブです

とかね、いろいろと頑張っているその活動を、そのままやっていけるのかというのは、それぞれ先生方もそうですし、生徒もそうですけども、当然、熱量がありますよね。熱量だと、ある程度限界があると思うんです。それを、更に上乘せして、負荷をかけることが、果たして大丈夫なのかっていう心配はあります。懸念もあります。先生方も息切れするんじゃないかと。

今でも、僕は農高は頑張ってるんじゃないかと思っています。それだけでは足りない、何を更に求めておられるのか、町外に生徒が流出するというのは、どうしても高等教育のない地域の宿命ですよ。これを構造的な問題として、僕は考えていかないといけないですけども、農高が一手に引き受けてくださっていいものなのかどうか、それは、僕らが地域の課題として考えていかなきゃいけないものを、1つ打破しようとしてくださっているんだと僕は認識しています。

それに対して、学校を誘致するだとか、そういったものを、生徒や先生方がどういうふう求めておられるのかを聞きたいですね。

すみません、色々と言ってしまっただけ。ちょっと気になった点だけ。考えておられることを教えてください。

○中標津農業高校 三品教諭

ありがとうございます。

まず、1点目ですが、その起業を法人化するかどうかなんですけど、私たちのイメージは、経済活動が中止となってしまうと、本来の目的からずれてしまうところもありますので、今、町からいただいている原材料費を素に、原材料を生産して、販売して、利益を生み出している機能を、例えば、独自採算という形で運用させていただいて、販売活動の中で得た利益を、次の開発活動の中でつなげていくというところに持っていきたい。仮想肥料というんですかね。段階的に始めていって、ある程度定着した頃に、法人化することに意味があるかどうかというところを、小・中・高で連携をしながら、判断をしていくのがいいのかなと思っています。

2点目が、経済性との連動というところで、おっしゃるとおり学校教育ですので、この経済性が、必ずしも、売上が上がったから教育として評価しますというところとは、本来的にはないのかなとは思いますが、企業活動っていうのが、社会性を身に付ける上で、町の企業とお話をする機会を設けることで、社会性・コミュニケーション能力を身に付ける機会になるであろうとか、あるいは町の企業にお願いして、現在、研究班の活動の中ですけれども、何かしらの町の企業にレシピを提供し、販売してもらおうっていうところで、そういった形で、大人と関わることによって、生徒を成長させていくのが、今回の起業の1番の狙いです。利益追求に走らないようにというのは、常に考えていかなければと思っております。

あと、現在の活動を更に評価していただいた上で、負担になるんじゃないかというところなんですけれども、私が冒頭でお話ししたところになるんですけれども、個人の熱量に頼っていたところを、ある程度平準化をしていくために、学校の授業の中で、今の研究班部門ですと、例えば、小・中学校と連携しようと思ったら、土日に活動するしかないというところが大きくて、その顧問は、毎週土日は部活をやった後に、研究班活動でいろんな農場に見学に行ったりしているんですけれども、それを、平日の授業時間内で達成できるようになれば、熱量の平準化っていうところにつながるのかなと。

最初は、やっぱり生みの苦しみがあると思うんですけれども、本当にマニュアル化っていったら、言い方が悪いかもしれないんですけれども、システムとして機能してくれば、誰がやっても、ある程度の質は確保できるプログラムになるんじゃないかと考えて、提案させていただいたところです。

○義盛委員

町外のリスクの問題なんかも、逆に、高校以上の教育活動というのは、やっぱり先生方からしても、来てもらった方が好ましいわけですね。

○町長

その件につきましては、4月から、若竹に外国人用日本語学校がオープンすることになりまして、当初50人っていう話でしたけれども、コロナの関係で、世界の人の移動が制御されている状況なので、少なめの開校にはなるようです。

外国人の方々が日本語を覚えた後、実際に就職しようとする時に、ある程度日本の経済システムなど、何ができるか、若しくは日本流の技術を知らなくてはいけないということで、それだけでは、結局、その人たちは帰ってしまうだけになってしまふ、日本語を覚えたというだけになってしまいます。

経済的なことを覚えるためには、更にその上の専門学校が必要であろうということで、せっかくここで2年間過ごすんだから、その後も慣れた人たちが学校に行けるようにするのはという話もございまして、まだ正式決定はしておりませんが、専門学校を作ろうという話を進めているところであります。

それは、当然、日本語を覚えた人が来ますので、日本語の学校でございまして、日本人も入れるということで、受け入れにも少し役に立つのかなと思いますし、是非成功させたいなと思っております。再来年に向けてのスピード感で進めていきたいと思っております。

○義盛委員

もう1点だけいいですか。この資料では、非常にハッピーな未来がたくさん見えて、気持ちも上がるんですけども、逆に、それぞれの段階で、例えば、失敗した時とか、どういった懸念が考えられるかといったようなビジョンはあるのでしょうか。

それぞれの考えで、先生方がこういったプランを組まれている段階で、ちょっと心配だなんて思うことがあったら教えてほしいです。

○中標津農業高校 三品教諭

お金が中心ではないというお話をいつもさせていただきながら、やっぱり心配になってくるのはお金ですね。

率直に申し上げて、今、計根別学園と行っている交流に関しては、学校も近

いので、ほぼ、お互いに徒歩で交流している状況で成り立っています。

もし、今後、中標津学園、旭ヶ丘学園と同じような連携をしていこうと考えた時には、やはり移動に伴うバス代ですとか、そういったところにお金がかかってくるのが、懸念されているところです。

あるいは、その経営活動・体験にしても、起業するにしても、当然、収支計画というものを作成するに当たって、どうしてもマイナス決算ということが考えられなくはないので、そういった時にどう対応するかというところは、懸念として持っています。

○義盛委員

結局は、お金が心配だということですね。

○中標津農業高校 三品教諭

そうですね。連携の内容についても、これから小学校・中学校さんと詰めなければいけないし、小学校・中学校で、それぞれ持つ2コマというのが、どれくらい違うのかというところも、改めて精査しないといけないのかなと思います。

その中で、どの程度の連携が必要で、果たして、こういう一貫性のプログラムっていうのが、小・中で求めているのかといったところも含めて、これから実践しなくてはいけないなと思っております。

○町長

そのほかに何かございませんか。せっきくの機会ですので。

農業高校の教員の皆さんは、ここで、学校に戻られるということで、今日は本当にありがとうございました。

続きまして、令和2年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果につきまして、説明をお願いいたします。

○教育指導監

私から説明いたします。

まず、今年度は、新型コロナウイルス感染に係る対応を余儀なくされました。

各学校では、臨時休校から始まり、分散登校、それに伴って、学校行事の見直し、そして、指導計画の見直しなど、これまで経験したことのない対応を迫られて、職員が力を合わせながら、様々な取組やアイデアを生かし、学校運営を任されてきました。

失われた学びの保障をどうするか、また、失われた学年・学級の絆はどうつなぎとめて、見つめ直すか、そうした課題に、感染予防を図りながら、校長・教頭が中心となって立ち向かっていく様子がありました。

特に、学校訪問としてなんですけれども、学校づくりや学級づくり、それぞれを見直して行事も取り組んだり、担任の先生をはじめ、学年団の先生方が学校全体で一人一人の子供たちを見放さない、責任を持って取り組んでいこうっていう、これまでにない学校の力っていうか、底力を感じた気がしました。そして、私もそれを見るたびに嬉しくもあり、頼もしいなと感じています。

そうした中、全国規模の学力テスト、学力調査、体力調査の実施が、全国規模では困難となっており、それぞれの学校で取り組もうということになりました。

今回、説明する体力・運動能力テストは、町としてまとめたものを指導室情報で整理していくので、自分たちでやっていただきたいなと思います。

まず、資料の1ページと5ページなんですけど、各町内小・中学校の体力テスト結果を示したものです。学年ごとの平均を記録して示しています。

令和2年度は、全国平均という比較ができないため、過去3年間の調査結果を、経年比較から分析しています。

資料の4・5ページを見ていただきたいのですが、対象等地域、学年は、小学5年生、中学2年生を対象として、全町の平均を表しています。

3ページに戻っていただきたいんですけども、各種目の項目別に、記録を得点化して、総合評価を出しています。A・B・C・Dの評価なんですけど、こ

の結果について、3点にわたってまとめさせていただきました。

まず1点目、過去3年間の経年変化から、小学校・中学校ともに、体力の向上が図られているというのがあるかと思います。特に、小5の女子、中2の女子が、総合判定でC評価、D評価になっているんですね。

私も、これまで経験してきた中で、中学女子が向上するっていうのは、なかなか難しいんですよ。というのは、発達段階にもよるんですけども、汗をかくのが嫌だとか、頑張る姿を見られるのが恥ずかしいとかっていう、そういう世代なんです。女子が頑張っている姿が、ケースとしては素晴らしいなと思っております。

2つ目です。小学校においては、体育を担当する体育エキスパート教員が、市街地3校を巡回して、体育の授業改善に関わっています。その成果が、こうした体力テストの結果にも現れているのかなと思っております。

3点目です。中学校においては、先ほど女子の伸びが見られるというお話をしたんですけども、男子も伸びてきています。ただ、今後も、生徒が意欲を持ってやってみたい、やれそうだといい、そういう具体的なやる気を持たせるとか、日常の授業改善を、今後も更に進めていかなければならないかなと思っております。

そして6・7ページ、今後、改善に向けた取組についてまとめております。まだ届いていないんですが、町内で取り組んだ標準学力テストの結果も届く予定です。

実は、本町の児童・生徒の学力について、課題があります。今回、体力テストの結果と合わせて、各校にも、学力との関連を踏まえた参考の取組として、発信していきたいなというふうに思っているところです。

1つ目、体力と学力の関係を、もう一度確認したいということです。週2回の体育の授業をしたクラスと、毎日体育の授業をしたクラスとでは、毎日体育をしたクラスのほうが高いという結果があります。

また、体力のある子は、算数・数学・国語・英語の学力が高いということも分かっているそうです。これは、脳にある海馬という組織があるんですが、運

動することによって、その海馬に刺激が与えられ、脳が活性化し、学習が身に付いていき、高齢者の適度な運動なども、認知症予防につながるという効果が示されている。

こうした部分で進めていきたいんですけども、毎日の体育ってというのは、現実的に無理なんです。けれども、おすすすめな、効果的な運動として、心拍数が上がる有酸素運動が良いとされています。5分から10分程度で効果が出るそうです。散歩や軽く走る、登下校を歩く。特に、歩かない子も増えてきている傾向にあるんですけども、安易に送迎をしてしまう保護者だとか、スクールバスも丁寧に運行されているんですが、丸山小学校のように、学校の手前で降ろして、そこから歩かせているという、そういう取組をしている学校もあります。そういった歩くなど、まあ軽い運動ですね。そういった取組もしていかなければならないかなと思っています。

そして2つ目は、なわとびの話題です。

アメリカの研究によると、なわとびをすることで、算数の成績が上がったという結果が出ているそうです。毎日10分程度のなわとび運動は、見た目以上に、意外と体力を使う運動です。これまでの朝学習の時間に、なわとびの時間を取り入れてみるのも、1つの取組かなと思います。ただ、やりすぎてしまうと逆効果になってしまうので、その辺は気を付けなくてはなりません。

3つ目は、ボール遊びです。ボール遊びは、ドッジボールやサッカーなど、いろいろな遊び方があるんですけども、特に、心拍数を上げるだけではなくて、親善となるということから、1つの目標に向かったり、協力し合ったりするっていうことも大事です。思いやりがついたり、結束力がついたり、そして、ピンチの時に集中して、次どうするかっていう作戦を立てられたり、そういうトレーニングにつながるということで、そうしたボール遊びの良い点も進めながら、各校に情報を提供し、投げかけていきたいなと思います。

それから、規則正しい生活習慣についてです。

朝ご飯は、1日のスタートをさせるための大事なエンジンをかける役割をしているんですけども、欠食してくる児童・生徒が意外と目に付きます。

やはり、その重要性について、生活習慣を見直してもらう、それは、学校からの働きかけで、家庭の協力も大事なんですけれども、そういったところにも目を向けていただくということ。それから、昼食や夕食も含め、適度な量で、バランスの取れた食事は大事なというふうに思います。

食事と同じように、睡眠をしっかり取ることも大事だということも、訴えていかなければならないと思います。

不登校のきっかけになっていくのも、こうした生活習慣の乱れが1つの引き金になっているケースを、よく聞きます。

睡眠を十分にとっている子というのは、成長ホルモンが適切に分泌されて、体がしっかりと成長し、記憶の定着、それから、体力回復も寝ている間に行われ、次の日の準備が整うと言われていています。

睡眠不足だと、運動したとしても、海馬が持つ機能が動かないこともあって、学習に集中することができないと言われていています。

しっかりと食べること、睡眠をとること、そして、体を動かすこと、そういうバランスの取れた教育環境を作っていくこと、この取組を進めていけたらなと思っております。

以上です。

○町長

今の発言につきまして、聞きたいことやご意見があったらいただきたいと思えます。何かありませんか。

学習の調査っていうのは、いつ頃届くのでしょうか。

○教育指導監

そろそろ届くところです。

本当は、間に合えばまとめる予定だったのですが、今日の時点では、まだまとまっていません。12月中に、各校で実施されているので、あとは、業者からデータ結果のまとまったものを取り寄せる予定です。

○町長

それは皆さまにお知らせするような。

○教育指導監

そうですね。まとめ次第、発信したいなと思っております。

○町長

運動の関係では何か。

○義盛委員

疑問なんですけれども、同じような地域環境にありながら、北海道内において、檜山地方は体力の評価が非常に高いんですよ。それは、やはり運動に対しての取り組み方なんでしょうか。それとも、体力そのものの存在なのか、そういう分析って、道教委とかはしていましたかね。

○教育指導監

私が把握しているのは、地域ごとにばらつきがあるなっていうのがあって、確かに檜山は高いですよ。それが、地域で何か取り組んでいるものなのか、独自で重点を決めて行っているものなのかというのは、ちょっと把握しきれてないので、申し訳ありません。

○義盛委員

多分、地域の環境は、根室管内さほど変わらないですよ。

小・中学校の統廃合され、スクールバスが運行しているという環境で、それでいて、例えば、基礎的な体力が衰えてないのか、衰えてないのはどうしてなのかなというのは疑問だったものですから、先ほどおっしゃってくれたように、小学校女子、中学校女子が汗をかくのを嫌がらないとか、頑張るようになった

ということで、評価がBになったということは、素晴らしい取組の評価だったんだと思うんですけども、更に展開する余地っていうのはあるもんなんでし
ょうか。

○教育指導監

もちろんあると思います。

授業の中でもそうですし、個人シートが出されているんですけども、自分
はどの種目で、どういった体力で課題を持っているかというのもあるし、これ
までの経年の記録も残っているので、それと比較して、次は頑張るぞっていう
目的意識を持たせるっていうのと、そうでないのとでは随分変わるので、その
辺の取組やら、担任・先生方の働きかけっていうのは、大きいと思っています。

○教育長

2つ、よろしいですか。

檜山の件ですけども、確実な情報ではありませんが、私の聞いたところによ
ると、学校ごとの取組で結構頑張っている、それから、部活動や少年団活動
が盛んだというように聞いております。学校規模が小さい所が多いので、意外
と早く効果が出るんですね。

これは自分の考えなんですけれども、学校をあげての取組というと、温度差
が学年・学校ごとで出ない、成果が出やすいっていう考えですから、そんなと
ころもあると思っております。

多分、檜山教育局をはじめ、教育委員会、それから各学校が連携して取り組
んでいるんじゃないかなと考えております。

それから、町内の子供たちの体力の向上については、先ほどお話がありまし
たように、体育専科が巡回しているとか、そういうことももちろんありますし、
あとは、体育教員の質の向上っていうのは、間違いなくあると思います。体育
専科教員任せじゃなくて、学年の教員が、必ず一緒に体育指導をやる時に、そ
ういう体制づくりもありますし、そういう先生が子供たちのモチベーションを

上げたっていうことも、十分考えられると思います。

数年前までは、中標津町の学校において、差はありますけども、随分改善されているなと思います。それは、やっぱり、指導室が各学校にきめ細やかな指導をしてくれたのもそうですし、あと、校長たちが横で連携をとって、しっかりやろうとやってくれたことも大きいと、私は考えています。

以上です。

○町長

ほかにありませんか。

○南委員

各学校で、朝学習の時間に本を読んだり、静かな環境を作るための努力はされているようですが、まさに家庭での考え方ですね。

送迎をする人がいなかったりだとか、朝ご飯が食べれなかったりだとか、食べる時間がなかったりとか、その朝ご飯に対する親御さんの考え方とかもあつたりで、まさに、お家の方の協力が必要なんだと思うんですよね。

じゃあ、どのように発信していったら良いのかを教えてください。

○教育指導監

家庭との連携っていうのと、学級管理だとか、あと、養護教諭の立場から、こういった勉強・体力、そういった部分について発信することも、学校ではよく取り組まれているかなと思います。

ただ、発信はするけれども、受け取れる側の家庭の問題っていうのは、極めてポイントがあって、私がこれまで経験してきた中では、子供のお便りを出さないっていう場合もあるんですけども、そうしたケースを除いたとしても、読んでいただいているケースだったり、見たとしてもなかなか生活の状況が変わらないっていうか、つながっていかないっていう実態かなと思っています。

それぞれ親御さん大変な思いで子育てをしていると思うんですけども、子

供の環境としてはどうなのかなっていうことを、改めてこうした数値とか状況を学校から発信しながら、もう少し説得力を持って働きかけていかなければならないかなと思っております。

○町長

食事を抜く原因ってというのは、どんな原因があるんでしょうか。

○教育指導監

私が経験してきた中では、親御さんが朝起きていない、だから、食事の準備ができていない、そういうケースでした。

だから、子供の生活習慣よりも、自分たちの生活習慣を重視した保護者がいる、それほど多くはないですけども、まあまあいるということです。

○町長

それは、学校を通じて指導するということになるんですかね。

○教育指導監

できる場合もあるんですけども、なぜそこまで言われなくちゃならないんだっていう勢いになりかねないですね。だから、どこまで家庭教育に踏み込めるかっていうのが、学校にも限界があるのが現状です。

○町長

じゃあ、お知らせやら何やら、なるべく数多く、しっかりとした指導になるよう大切にしなければいけないっていうことですね。

○教育長

あとは、大体、指導監がお話しされたような場合が多いんですが、それ以外に、子供たちの生活習慣が乱れていて、ぎりぎりまで起きてこない、そういう

場合もあります。

私が、学級担任時代に、参観日でお話をしました。

味噌汁とご飯とか、パンと目玉焼きなんてそんなこと言わない、菓子パンとバナナだけでいいから、とにかく食べ物を用意してって。そういうレベルです。そういう家がたくさんあるんです。朝起きて、子供が学校行くまでに食べ物が無い、そういう家が存在している部分も確かです。

だから、そういう不毛的なところで、担任や学校がどんなに努力しても、なかなかできない部分っていうものもあることは確かです。

○教育指導監

小学1年生の例が印象に残っているんですけども、朝、学校を見回った時に、机の上で疲れ切ってますね。朝ご飯を食べていない、お母さんは寝ていた、お母さんのお仕事が遅いのかな、昨日22時までパチンコをやっていて、自分は車の中で22時まで寝ていたっていう話で、私は、切実な思いで、その話を聞いたんですけども、参観日や行事には来ません、そして連絡もなかなかつかない、そういう家庭でした。

子供が不憫でならなかったんですけども、そういうところに親御さんに振り回されている子供の実態はあるんだなというところがあります。

それにしても、その子が大きくなっていく時に、学校でできること、食生活がどれだけ大事なのかとか、睡眠時間や生活の基本的な生活習慣がどれだけ大事かということも教えて、その子が頑張っていけるように働きかけなくてはならないかなと思っています。

○町長

食べるなり、寝るなり、基本的な習慣ですから、しっかり身に付けて、良い成長を、教育も含めてですけども、指導とはどんな体制があるのかを、しっかり考えていかなければいけないですね。

そのほかにありますか。

(委員から「ありません」の発言あり)

○町長

この件につきましては、今のお話ということで。ありがとうございます。
それでは、次です。

○管理課長

そのほかで、1件説明させていただきます。

中標津町教育大綱というものになります。

この教育大綱というものにつきましては、大綱の上段にも記載しておりますけれども、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の3に基づきまして、平成31年に総合教育会議において策定をしているところでございます。

期間につきましては、大綱の中段にもありますが、平成28年度から令和2年度なんですけれども、今年度で5年目を迎えるところになっております。

本来では、今年度、見直しの時期ではございますが、総合計画に基づいて定めることとなっているものでございまして、その基となる町の総合計画が、新型コロナウイルス感染症の影響により、策定が遅れていることから、総合計画が策定されるのを待ってから、策定したいと考えておりますので、ご理解をいただきたいと思っております。

説明については、以上です。

○町長

具体的な時期っていつ。

○管理課長

6月に策定予定です。

○町長

その教育大綱自体が策定されるのはいつ。

○管理課長

総合計画策定の後ですので、6月に終われば、7月以降に総合教育会議を開催して、そこで策定するというかたちになります。

○町長

じゃあ、夏ぐらいのイメージで。

○管理課長

すぐ作るとなると、そういうことになります。

○町長

スムーズに作るということね。分かりました。

○町長

そういうことで、この件についてはよろしいですか。

一応、議事が終わったところですが、全体を通して伺いたいと思いますけれども、何かありますか。よろしいですか。

(委員から「はい」の発言あり)

○町長

それでは、本日は、大変ありがとうございました。

議事は終了しますが、今後も、皆さまの意見をしっかりいただきながら、教育行政の中身を深めていきたいと思っておりますので、よろしくしたいと思います。

これもちまして、令和2年度中標津町総合教育会議を閉会いたします。
今日は、大変ありがとうございました。